HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	伊井直行論 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	川﨑, 俊
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第13712号
Issue Date	2019-09-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/76332
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Shun_Kawasaki_review.pdf (審査の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　川　﨑　俊

主査　教　授　押　野　武　志
審査委員　副査　准教授　水　溜　真　由　美
副査　准教授　村　松　正　隆

学位論文題名
伊井直行論

・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文は、本邦初の総合的な伊井直行論である。伊井の創作活動は、グローバル資本主義下における、小説のリアリズム、および「人間」概念の変容が顕著になった状況から出発していたことを示したうえで、伊井の「会社員小説」群の特質と今日的な意義を追究したものとして高く評価することができる。なお、本論文の全八章中、第一章、第三章、第四章、第五章は、査読付きの学会誌に掲載された論文を増補したものであり、当該研究領域において既に高い評価を得ている。

第一部では、伊井の「会社員」をめぐる問題系をデビュー作の「草のかんむり」に認め、伊井の文学を貫く基底的なものを析出している。グリム童話の「蛙の王子」等を換骨奪胎した本作は、伊井のその後の会社員小説とは異質なマジックリアリズム系の作品群（「ジャンナ」、『進化の時計』等）ではあるのだが、フィクションとノンフィクション、人間と非人間、イメージと言語との境界を複雑化する様相が示される本作の特徴から、後の会社員小説群との関連性を明らかにすることで、伊井文学の総体を一貫したパースペクティヴから論じることに成功している。つまり、「人間」を規定するイデオロギーが多様化・細分化する状況においても、人間／非人間を別つものとして残存しつつ不可視化されてきたものとして、伊井が発見したものが、「会社」、および「会社員」であった。こうして、伊井の「会社員」論とその小説化の試みは、従来の文学作品、あるいはそれを取り巻く言説を相対化し、国家と個人との関係とは全く異なる主体化の軸を考えることにつながるという重要な指摘を行う。

第二部で取り上げた三つの小説において、さらに、その問題系の先鋭化・深化を読み取る。「彼」という主語に則した文体が組み立てられ、国家から切れた「会社」と「会社員」の主体性と、アクシデントの可能性とを並置し、相互の距離を示した最初の会社員小説「さして重要でない一日」の分析、平板な叙法を用いることで、来るべき資本制の苛烈なヴィジョンを「会社」なき郊外に出現させた「雷山からの下山」の分析、そして、「雷山からの下山」の書き方を継承しつつ、「会社」と「会社員」の関係を突き詰め、資本主義社会の誕生と同時に誕生した「会社」それ自体がそのまま近代的「人間」であるという視座を提出した「星の見えない夜」の分析と、いずれもこれまで本格的に論じられてこなかった伊井の会社員小説研究であり、その特質と作品相互の関係性を明らかにしたことは、伊井文学の再評価に大きく寄与している。さらに、本論文は、「会社」・「会社員」を「近代小説」のリミットと捉える視座から日本近代文学（史）の再定位を迫る壮大なプロジェクトにつながるものであり、学術的な価値は極めて高い。

第三部では、これまでの成果を踏まえつつ、二十一世紀以降に再び本格化した、伊井の「会社員小説」（論）に関する活動を丁寧に追いながら、今日的な「会社員小説」の新たな可能性を提示する。「ヌード・マン・ウォーキング」と「ヌード・マン」という、一つの題材について書かれた小説の二つのヴァージョンが示すヴィジョンは、資本制と監視社会が結託した一九九〇年代以降の日本社会から脱出する二通りの試みとその困難さが示されており、そこから、「会社」と「個人」との新たな関係性の構築を探る道が選び取られていることが論証される。そして、伊井は、二〇〇〇年代に入ると、「公私の分断」を「会社員」の特徴として見出すことで、「会社員小説」のジャンルを再度規定し、小説の可能性を押し広げようとしたことを明らかにした。

・学位授与に関する委員会の所見

本審査委員会において、上述の研究成果に関して概ね説得的に論証されており、伊井文学の全体像に迫る学術研究であると判断した。

ただし、問題がないわけではない。まず、本論文は、伊井の「会社員」論への依存度がやや高く、伊井の「会社員」の捉え方の特殊性とその限界についての批判的視座からの小説読解も必要であった点が挙げられる。それと関連し、伊井が自認する会社員小説以外の小説への分析がやや手薄になっている。次に、多くの重要な問題提起がなされながらも、その論証の過程において用いられた分析概念のなかには、やや曖昧で恣意的なところがあり、「会社員」をめぐる小説の方法と文体については、さらなる精緻な分析が求められる。

しかし、このような問題点は、伊井文学の特質とその可能性、および変容のプロセスを通史的に、そしてジャンル横断的に論じつつ、同時代言説との関連性も含めて多様な角度から再検討するという、本論文の対象領域の広さと射程の長さに由来するものであり、上述の研究成果をいささかも損なうものではない。今後、伊井の他作品の分析を通してそれらの課題は克服され、さらなる研究成果も期待される。

本審査委員会は、以上のような審査結果により、全員一致して本申請論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものであると認定した。